

伊藤嘉代子と裏千家

～政宗と利休へと遡る嘉代子の縁～

名掛丁東名会 梅津恵一

もう 50 年も前の話だが、私は京都御所の北側にある大学に通っていた。大学の北側に裏千家の屋敷があり、放課後その周辺を散歩すると、夕餉の支度に合わせて豆腐を売るラッパの音などの物売りの声がよく聞こえて、長閑な平安の都を満喫する心地がした。

ところで、安土桃山時代に新しい茶道を開いた千利休の孫、宗旦には 3 人の男子があり、茶道の三家、表千家（宗佐）、裏千家（宗室）、武者小路千家（宗守）が誕生した。

その一つ裏千家に明治維新後、思わぬ存亡の危機が訪れた。天皇と共に公家達が東京へ住まいを移すと、京都には習い事としてお茶を嗜む人がいなくなった。裏千家は職を失い、先祖伝来の家宝を売りさばいて急場をしのいだが、それも底を付き、とうとう借金に追われる生活となってしまった。物売りたちは貸し倒れを恐れて、裏千家の前を通るときだけは無言で通り過ぎるという話が巷で噂される程に零落してしまった。

13 代家元を継いだ円能斎は危機打開のために居を東京へ移し、茶道愛好者を増やす目的で東北、北海道へも足を運んだ。その噂を聞いた、仙台で石州流の茶道を教えていた伊藤幾久寿は、裏千家に手紙を出し「家元に仙台にお出で頂いて、公家様のお茶を是非ご教示頂きたい」と申し出ると、円能斎は快諾し仙台を訪れた。

幾久寿は円能斎が茶道復興のために大変苦心していることを知り、手塩にかけて育てた養女、嘉代子とともに円能斎の後ろ盾となって、手厚くもてなした。その心遣いに円能斎は深く感謝するとともに嘉代子の才能と美貌を知り、息子淡々斎の嫁にと懇望した。その申し出に、幾久寿は見ず知らずの地に嘉代子を嫁がせることにはためらいがあり即答はできなかった。大正 4 年 6 月、淡々斎は仙台に出張があり、初めて嘉代子のもてなしを受けると、一目で気に入り、千家から改めて嘉代子に婚姻の申し入れがあった。大正 6 年 2 月 20 日、目出度く慶事が行われ、新郎は 24 歳、新婦は 20 歳と若い二人の門出であった。

嘉代子は家元の母から厳格な家風と茶道の指導を受けた。大正期の裏千家は茶道も一般には普及せず、家計も苦しかったが、嘉代子は良く耐え忍んだ。

大正 13 年、円能斎が 53 歳で逝去すると、淡々斎は 32 歳にして家元 14 代を継いで当主となり、嘉代子と共に幾多の苦難を経て、茶道の普及に努め、全国に伝わる流儀を統一して淡交会を設立した。嘉代子は茶道のほかに広く社会貢献し、家庭裁判所調停委員、司法委員等の公職も務め、藍綬褒章と共に京都市文化功労章を授与された。さらに、仙台では女性初の「名誉市民」にも選

ばれた。昭和 39 年淡々斎亡き後は息子 15 代宗興（玄室大宗匠）とともに茶道の海外普及にも努め、淡交会はのちに 200 万を超える会員、門弟をもつ大組織に発展した。

話は 400 年以上も昔にさかのぼるが、伊達政宗は豊臣秀吉から小田原攻め参陣の要請を受けた。ところが、政宗はお家の諸事情で参陣が遅れて秀吉の怒りを買ってしまった。政宗は秀吉との謁見で死を覚悟したものの「千利休に茶道を学びたい」と申し出たところ、風雅の心ある武将と一目を置かれ、願いがかなって利休から茶道の教えを受けることとなった。その結果、利休の口添えがあったのか政宗は命拾いをした。

嘉代子の先祖はかつて伊達家の家老であった。嘉代子が裏千家に嫁ぎ、その後の隆盛に多大に寄与したことは、「政宗の命の恩人、千利休への報恩の宿命をもって生まれた人ではなかったか」と言う人もある。当時、東華女学校（現仙台二華高校）を卒業したばかりで、何の不自由もなく育った嘉代子が、異国の地とも言える京都でこのような過酷な運命を背負いながら人生を全うしたことは驚きであった。激動の時代に生きた明治生まれの女性の芯の強さに、改めて敬服する。

【参考資料】

『宮城の女性[正]』中山 栄子／著 1988 金港堂出版部 S281 ナ
『松風の家 上・下』宮尾 登美子／著 1992.9 文芸春秋 B ミヤ

【関連写真】仙台市 HP より



<仙台市名誉市民 千嘉代子氏>

千嘉代子氏は幼少から茶道への修行に努め、裏千家家元 14 代淡々斎宗室宗匠と結婚後は、日本の茶道文化振興の道に進んだ。「国民皆茶への道」を提唱し、日本茶道の隆昌の基礎づくりに貢献されたほか、国際茶道文化協会理事長として海外での日本文化の紹介や国際親善にも尽力された。



<仙庵 太白区大年寺山公園内>

昭和 47 年に仙台市名誉市民推戴を記念して、千嘉代子氏より仙台市に寄贈された茶室。

【関連資料】

『郷土みやぎの輝く星』『郷土みやぎの輝く星』刊行委員会／編著 1985 学研 S281 キ
『仙台領に生きる郷土の偉人傳 2』古田 義弘／編著 2021.4 本の森 S281 フ
『裏千家の四季』山上 直子／文 2004.11 淡交社 791 セ
『千利休』熊倉 功夫／著 原田 茂弘／著 2025.6 清水書院 791 セ
『もっと知りたい千利休と茶の湯』千 宗屋／著 2026.3 東京美術 791 セ
『日日是好日』森下 典子／著 2002.1 飛鳥新社 791 モ
『好日絵巻』森下 典子／著 2020.7 パルコエンタテインメント事業部 791 モ
『すぐわかる茶の湯の美術』矢部 良明／著 2002.3 東京美術 791 ヤ
『利休の風景』山本 兼一／著 2012.12 淡交社 791 ヤ
『宮尾登美子全集 第 11 巻』宮尾 登美子／著 1993.9 朝日新聞社 918 ミ

